【登場人物】

・ロバート・クロス
主人公。ネオンライトタウンの権力者として恐れられている。ある人物に、自分の過去を打ち明ける。幼いころに母親を亡くし、盗みやゴミ漁りをして路上で生活するという不遇な子供時代を送る。

・コーラ・クロス
ロバートの母。ブラフマー街の貧しい娼婦。客との間にロバートを身ごもり、周囲の反対を押し切って出産する。ロバートが四歳の頃病死する。

・イーサン・カーター
ロバートが瀕死の妊婦の出産を助けて生まれた赤ん坊。イーサンという名前をロバートから授かる。

【重要用語】

・シヴァ街
ネオンライトタウンの三つの区分の内、最も豊かな街。

・ヴィシュヌ街
三区分の内の真ん中。中間階級の人々の住む街。

・ブラフマー街
ネオンライトタウンの最底辺に位置するスラム街。ロバート、イーサンが暮らす。

・ヴァルナ社
ネオンライトタウンで最も力のある会社。マフィアと癒着があり、悪い評判が絶えない。

【前回の粗筋】

一九二七年、アメリカ合衆国イリノイ州北部にネオンライトタウンという治安の悪い街があった。そのネオンライトタウンのトップ、ヴァルナ社の社長として君臨するロバート・クロスは、美しくも冷酷な権力者として街の住人に恐れられていた。

ある夜、ロバートは自分の書斎にある人物を呼び、自分の過去を打ち明ける。それは、暴利を貪り、ぜいたくな暮らしを送る今のロバートとは遠くかけ離れたものだった。

一八九五年、ロバートはブラフマー街で、病気持ちの娼婦の私生児として生まれた。貧しいながらもロバートは優しい母や娼館の人々に愛され、幸せな生活を送る。しかしロバートが四歳になった時、母は病死してしまう。養育費の稼ぎ手が急死したことで、娼館の人々はロバートを養えなくなり、泣く泣く彼を手放す。路頭に放り出されたロバートは、何度も辛い目に合いながらも、何とか一人で生きていく術を身に着けていく。それでも、彼は一人ぼっちの寂しさだけは克服できず、生きる理由も見いだせないまま日々を送っていた。

六歳になった時、ロバートは一人きりで出産に苦しんでいる女と道端で出会う。女に言われるまま、ロバートは彼女の出産を手伝い、一人の男の子を取り上げる。我が子の誕生を見届けた女はロバートに我が子の名字を教え、息絶える。「上の名前を付けてあげて欲しい」という彼女の遺言を守り、ロバートは赤ん坊に「イーサン」という名前をつけ、彼を育てることを決意する。辛い生活を送るロバートは、そこで初めて生きる希望を見出したのだった。

# ブルーアイズヒーロー2　デイジー・アン

こだま
挿し絵：市川司幸

イーサン・カーターはこうして誕生した。私とあの子の母親以外は誰も気づきはしない、そんな生まれ方だった。イーサンの名前が街中に知れ渡るのは、もっともっと先の話だもの。

私のぼろぼろの掘っ立て小屋はたちまち元気な泣き声に満たされた。その頃にはもう独りぼっちで泣くことも、母の面影を寂しく思い出すこともなかった。しかし、それは、私が自分の弱さに打ち勝ったからとか、成長したからとかそういう理由ではなく、単純に多忙過ぎたからだ。

住処にイーサンが加わった分、私は自分の食い扶持に合わせて彼のミルクや襁褓を賄わなければならないため、稼ぎを倍にする必要があった。今まで以上にがむしゃらに生きなければならなかった。赤ん坊を背負ったままでは盗みはできない。だから収入源は専ら物乞いと少しの使い走りの仕事だった。こちらはイーサンの存在が大変に効いた。赤ん坊はどんな業突く張りでも憐憫の情を掻き立ててしまうのか、物乞いにおいてはまあそこそこの金が手に入った。他では、犯罪組織の情報伝達や麻薬の運搬などもしていたのだが、赤ん坊がいればそれだけ怪しまれにくいのか、この仕事も普段より多く依頼された。それでもやっぱり二人分稼ぐには毎日かつかつで、私はよく自分の分を削ってミルクを買っていた。お金がどうしても手に入らないときは、街中歩き回り、女達に頭を下げて乳を貰いに行った。

こうして何とかイーサンを育てたが、やはり思い起こされるのは大変だったことが多い。イーサンは多少仕事の役には立ってくれるが、乳を貰えるのが当たり前と考えているらしい。とにかく腹が減れば泣き喚けば何とかなると思っているのだ。二人そろって一日中口にできない日など地獄だった。「この俺が腹を空かしているには全部貴様のせいだ」とでも言いたいのか、イーサンは一晩中泣いて私を責め苛んだ。こんな風に泣かれる日は一度二度のことではない。腹が減っただけではなく、おむつを替えて欲しい、眠たい、暑い、様々な理由でイーサンは泣いた。理由なく泣くこともあった。ミルクはさっきやった、おむつも変えてあげた、なのに次は何？　どうして泣いてるの、お前は？　答えてくれるはずもない疑問がぐるぐる心に渦巻いて、私は自分までもらい泣きをしそうになった。しょっちゅう夜泣きするせいでろくに眠れない、ちょっと目を離すとどっかに這っていこうとするからずっと監視しなければならない、そんな生活に何度も心が挫けそうになった。

それでも、私は諦めなかった。憎たらしいほど大泣きされても、やっぱりイーサンは可愛かった。機嫌がいい時にきゃっきゃと笑って、私の頬を抓るイーサンがもう本当に可愛くて。この笑顔のためなら何でもできる気がした。どんなにお腹が空いても、眠たくても、心が挫けそうになっても持ちこたえられた。この子と一緒なら何だって出来る気がした。

それに、不思議なことに周りの人々も少し変わった気がしていた。以前は私一人になど目もくれなかった道行く人々も、イーサンを見ると少しのお金を黙って渡してくれた。私を虐める子供達も、イーサンにだけは手を出さなかった。女達に「お乳を分けてください」とお願いすれば、断られることは珍しかった。おまけに私に子育てを教えてくれる女もいた。赤ちゃんにげっぷをさせる方法や、おむつの変え方、食べさせていいもの悪いもの。私は女達から与えられる知識を基に、イーサンを生き延びさせた。さすがに大金をくれるような真似は誰もしな

かったが、誰の心の隅にもひっそりと残る小さな優しさに何度も助けられた。自分一人きりで立派に何かをやり遂げるなんてできないんだな。きっと私もこんな風に育ってきたんだろう。少しずつ優しさを受け取り、そして少しずつ周りに優しさを与えながら。そう考えると、父親の分からない子を産んで、若くして死んだ母ちゃんも、大して不幸な人ではないように思えた。

イーサンは特別大きな病気をすることもなく、すくすくと育って三歳にまで成長した。その間に私は彼に言葉を教え、つかまり立ちの仕方を教え、物の噛み方、トイレの仕方、挨拶の仕方、遊び方を教えた。

初めて彼が喋った言葉は「ロバート」だった。その子音のあやふやな言葉を聞いた時、私は嬉しくて嬉しくて、小屋の狭さもよく考えず飛び上がって、壁に頭を激突させる羽目になった。

大きくなると、イーサンは窃盗の協力もしてくれるようになった。彼は有難いことに、私よりも体力があり足も速かった。生来丈夫に出来ていたのだろう。目にも止まらぬ速さで物を掠め取り、見つかって追いかけられても捕まることはなかった。そうして手に入れたものは、ほとんどイーサンにやった。

「ロバートは食べないの？」

と、彼は鋭い勘を働かせて私によく言ったが、私はその度に嘘をついてイーサンを満腹にさせた。

夜が来ると、イーサンは私の両腕の間にすっぽりと収まるようにして眠った。骨と皮だけの腕に、絶対的な信頼を置いていたのだ。時々、彼の手が私の平たい胸元を寂しく弄った。その度に、「ごめんね」と囁いた。昼間は忘れていた寂しさと不安が、その時だけはじわじわと胸の中に染み通った。

この胸からはどうがんばってもお乳は出ない。俺はどうしたってこの子の本当のお母さんにはなれないんだ。

そんな風に切なく何度も思った。これからもちゃんと食べて行けるだろうか。この子に我慢をさせていないだろうか。俺といて、この子は幸せなんだろうか。そんな不安に涙を誘われそうになると、きまってイーサンの柔らかく細い体を強く抱きしめた。すると、あの子はいつも私の思いを見透かしていたのか、小さな手で私の背を摩ってくれた。昔母がしてくれたのと同じ手つきに、私はそっと不安を消していった。そんな風に幾夜も過ごした。夜を超すごとに、もっと笑えるような気がした。少しずつ、笑顔でいられる時間が長くなっていくように感じた。

さて、私が十一歳に、イーサンが五歳になった時のことだ。私の誕生日が過ぎ去ると、たちまちひどく暑い夏がやってきた。本当に最悪な季節だった。今まで類を見ない暑さになったあの頃は、まるで熱波がうねうねと道を這いまわるのが目に見えるようだった。その一九〇六年の夏の頃は、私もイーサンもすっかり暑さに堪り兼ねて、小屋に蹲ったまま一歩も動くことが出来なかった。

ところで、その頃の私達の外見について少し話しておこうか。今では「五月の薔薇」だとか「マムルークの騎馬兵」だとかダサい名前で呼ばれるくらい、美しさを賛美される私とイーサンであるが、あの頃と来たら美のイニシャルBの曲線一本ほども、美しいと言われる要素はなかった。

手足はまるで鳥のように関節や骨の形が皮膚の上に露わになり、爪や肌はひび割れてどす黒く染まり、何年も洗っていない髪は伸び放題で虱だらけ、服も汗を吸いこんでほとんど腐りかけていた。ただ、私とイーサンで間違いなく美しかったのは、瞳の色だけだった。ではどうやって今の美しさを手に入れたのか。それを今から話そうと思う。私が美しくなった、あの忘れがたい夏の日のことを。

八月も中旬になって来たころだ。その頃は夏の暑さと湿気で食べ物やゴミは腐り、今まで類を見ないほどのひどい衛生状態になった。道には害虫やネズミが這いまわり、羽虫がぶんぶん唸り、何人もの人が病で倒れた。

そして私も被害を被った。ノミに発疹熱を移されたのだ。

発疹チフスと違い、発疹熱は比較的軽度な病ではあるが、私はその苦しさに七転八倒した。熱よりも体中の痒みが何よりも辛かった。掻いても掻いても収まらず、頭皮をバリバリ掻き毟れば血と一緒に何匹もの虱がボロボロと落ちてきた。気が狂いそうだった。

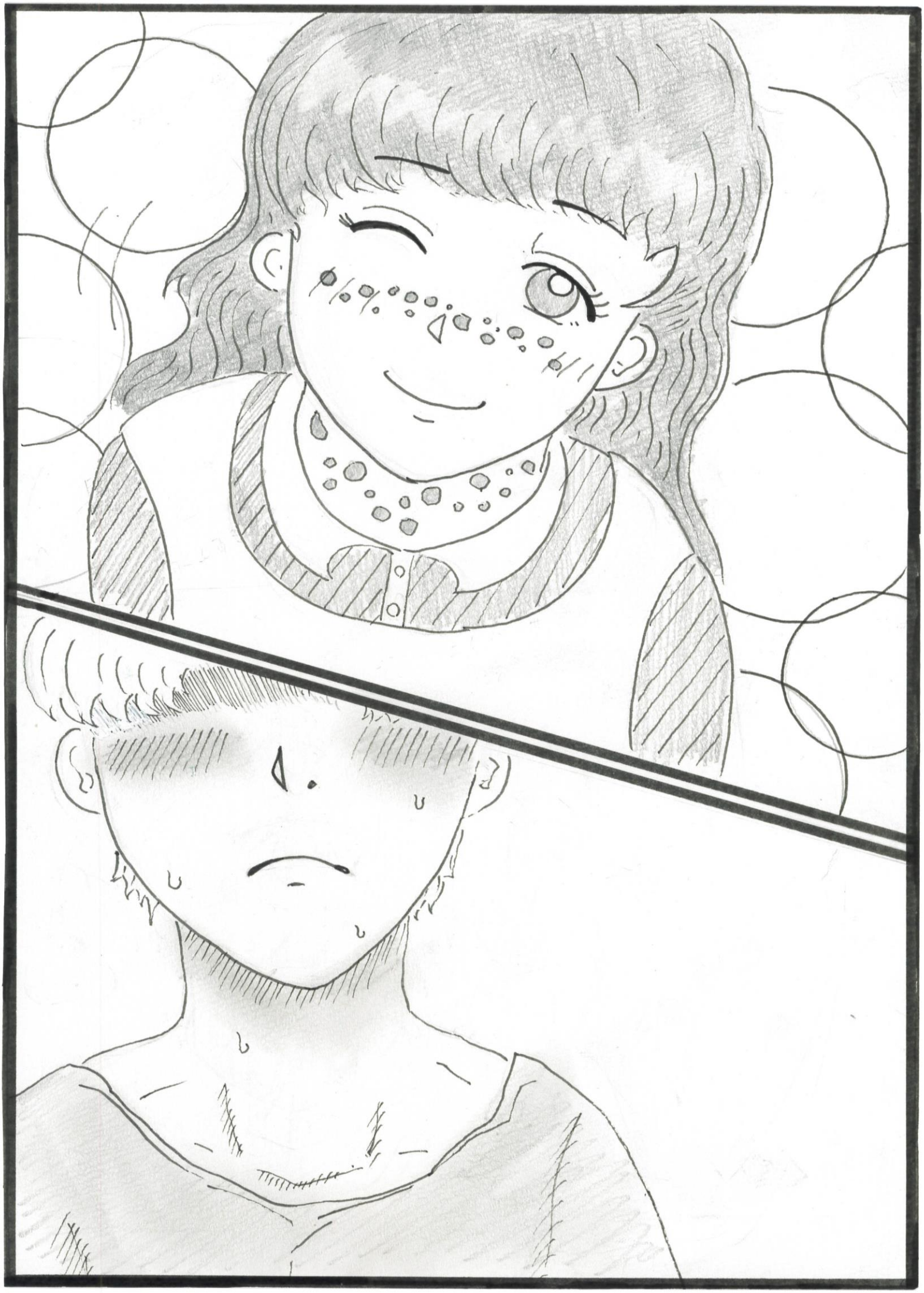
イーサンは感染を避けるために、他の子供達の徒党に金を払って預かってもらっていたので、私はこの苦しみに一人で対処する羽目になった。虱に血を食いつくされ、体中掻き毟り、熱にうんうんうなされ、そしてまた朝を迎える。そんな毎日に、暫く忘れていた独りぼっちの苦しみが私の涙を誘っていた。

ところが、もしずっと前にこれから行き着く運命が分かるとして、尚且つどういう道を選べるとしても、私は喜んで発疹熱にかかりにいくだろう。ああ、そうだ。私はこれから第二の出会いをする。全ては、この発疹熱のおかげで。

ある午後の日の事だった。一旦熱も痒みも引いたので、私はふらふらと小屋の外へ出た。喉が渇いて仕方なく、

どこかで水を飲もうと思ったのだ。
猛暑で頭がぐらついた。視界が湾曲し、道が伸び縮みして見えた。きっと日射病にもかかっていたのだろう。私はどこを歩いているのかも分からず、それでも喉の火照りだけを覚えながらブラフマーの街を下って行った。途中井戸がいくつかあったが、不思議なことに私は無視した。まるで向かうべき場所を脳が、精神が知っていて、体を導いているかのようだった。
やがて廃れた売春街に出た。枯渇した喉、だるい頭、掻き傷でひりひりする肌と共に私は歩いた。地面の上に寝た女達が私の足音にはっと身を起こしたが、私の小さな姿とずたずたの肌を見ると、舌打ちをしてまた寝転がった。幾人かは私の足首を掴んだが、私はその度に「金ならないよ」と掠れた声で言った。悲しい心もちがした。
その時だ。突然、渇きを知らない潤んだ可憐な歌声が私の耳に飛び込んだ。そして涼しい水の音。私ははっとして立ち止まった。こんな寂しく絶望の渦巻く街には似つかわしくない、弾むように楽し気な歌声だった。
心臓が脈打つ音、血の湧き上がる熱さ、息が詰まる心地いい苦しさをその時初めて感じた。その声は露を落としそうなほど潤み、私の餓えた喉を一瞬で癒した。耳から口へと伝い落ち、やがて心臓に届いた。
歌っている人に会いたいと思った。顔を見てみたいと思った。こんな諦めばかりの街の中でこんなに楽しく歌えるのはどんな人なんだろう。その人に会ってみたい。そう理由もなく思った。
気づけば声を追って走りだしていた。視界がぐらつくことはなかった。駆け足を長い事忘れていた足は力強かった。こんな胸の高鳴りは他に知らなかった。母に向けていた物とも、イーサンに抱いている物ともどこか違うような気がした。こんなにも激しく、強く何かを見たい、欲しいと思ったのはあれが初めてだった。
歩道を駆け、街路を曲がり、ようやくその声の元へ辿り着いた。点々と地面についた水の跡を追うと、やがて歌いながら洗濯をする三、四歳ほど年上の娘が目に入った。私は彼女の髪に釘付けになった。赤銅色。偶然道端に落ちていて、空腹の私を救ってくれた硬貨と同じ色。
私はふらふらと彼女の方へ近づいて行った。やがて顔の線が露わになる。日に焼けた肌、優しく垂れ下がった目尻、そして頬には病に打ち勝った証の痘痕。
彼女はやがて、洗濯桶の水面に映った私の顔に気がついた。歌声が止まり、背に垂らした赤銅色の髪が揺れた。彼女の顔が持ち上がり、深緑の瞳が現れた。母が埋葬された、あの楡の木にたっぷり実っていた葉と同じ緑色。
彼女はじっと私を見つめ、突然近づいて来た見ず知らずの不審な子供ににっこりと微笑した。
「どうしたの坊や？　何かご用？」
出された声は涼しかった。歌声だけではないようだ。その声だけで、私の全身を燻している熱を一気に奪うかのようだった。
「水。水ちょうだい」
私は湿った声で慌てて言った。彼女はすぐに理解したのか、ぱっと翡翠のように立ち上がった。背後の手押しポンプから欠けた椀に水を汲み、私の唇に宛がった。水は生温かったが甘かった。
「ねえ、坊や」
と、彼女は私の満足そうなため息を聞いてから言った。
「何だかえらく汚れちまって、虱が集ってるじゃない。かわいそうに、痒いでしょう？　どれ、あたしがお水で綺麗に洗ったげようか。すぐに楽になるよ」
彼女は何の気もなしにまたにっこりと笑った。にっこりというありきたりでかわいい言葉が、彼女には本当だった。
私は無言で頷いて、変に緊張しながら衣服を脱いだ。普段は何とも思わない貧相な体が、妙に恥ずかしく思えた。しかし、彼女はそんなことには構わずに、もう一つの桶に水を溜めながらまた歌を再開していた。
歩き回る彼女の足は、まるで浮雲を踏むように軽やかだった。着ているシャツやスカートは律儀に洗濯されているが、所々洗いきれなかったであろうシミや垢が染みついていた。きっとそれ一着しか持っていなかったのだろう。服から覗く手足も、私ほどではないにしろひどくやせ細っていた。貧しい暮らしに長い事慣れてしまっている体だった。きっとその肌に、絹のドレスやコルセットが触れたことは一度だってなかっただろう。
それなのに、彼女がスカートの裾を翻す様子は、頭で思い描くどんな王侯貴族のカドリールよりも優雅に見えるのが不思議だった。顔中の痘痕でさえ、まるで夜空に散らばった星のように思えた。深緑の瞳は、屈託のない無邪気な喜びを移していた。
私は心臓を口から吐き戻しそうになりながら、桶に張った水に体を沈めた。暖かい水は火照った心を冷やしはしなかった。私のズタズタの体を見て、彼女は驚いた声を上げた。
「まあまあ、すっかり傷だらけじゃないの！　大丈夫よ、坊や。洗ったら薬も付けたげる。三日も立てば綺麗に治っちゃうからね」
彼女は粗布に石鹸を付けて私の体を優しく洗い始めた。洗濯用の石鹸しかないことを彼女は詫びたが、私は構わなかった。確かに泡は弱い肌をちくちく刺したが、痒い

部分には心地よく、尚且つ彼女の語り掛ける声に夢中で、それほど痛みなど感じなかったのだ。
「まだ坊やには早い話かも知れないけど」
と、彼女は忙しなく手を動かしながら言った。
「あたし、このお店で働いてるの。でもね、二年前に病気しちゃって、ほら見てよ、こんなひどい痘痕面になっちゃった。そのおかげで全然お客付かなくってさ。まあ、元から美人とは言い難かったから、大して惜しくはないけどね。だからこうして姉さん達の洗い物して役に立たせてもらってるの。有難いわ。ああ、でも坊やにはまだなんのことか分かんないよね。まあ、それがいいわ」
彼女は自分の身の上を語った後で困ったようにそう言ったが、私はちゃんと彼女の話の意味を理解していた。
ああ。この人は娼婦なんだ。それでどこかお母ちゃんと同じ匂いがするんだ。
そう簡単に理解することが出来た。そう分かった時、ちょうど彼女の赤土のような髪が伝い落ちて私の頬を掠め、彼女の唇が私の唇の端で物を言った。
「でもね、あたしお洗濯好きよ」
その声を聞いて、脈打っていた心臓が突然ドキリと跳ね上がった。頬に血が昇り、少し収まっていた熱が急にぶり返したような気がした。
私の肌には、垢やゴミでどす黒くなった部分が剥がされ、その下にあった驚くほど真っ白な部位が現れ始めた。自分の肌がこんなにも白いとは思わなかった。彼女は歯の粗い櫛で私の頭の虱を削ぎ落し、髪にも石鹸を泡立てた。洗われた髪が鋏で短く切り揃えられ、体をタオルで拭かれ、掻き傷に薬が塗られた。
「昔、馴染のお客だった優しいお医者さんがいてね。その人がくれたのよ。とってもよく効くんだ」
彼女はそう言って私の頬に手を添え、肩越しに振り向かせた。私と彼女の目が真っ直ぐに交じり合い、深緑の丸い面に見たこともない顔が映っていた。白く慎ましく、そして信じられないほど美しい顔が。
「まあ」
と、奥底からせり上がったような声を出し、彼女の頬が見る見るうちに赤く染まった。彼女は、そして興奮した様子で赤い頬を両手で押さえ、盛りの花のように笑って言った。
「まあまあ、何て綺麗なの！　今まで汚れてて気が付かなかったけど、坊やとっても美しい顔してるのね！　まるで天使のようだわ！」
私は驚いて彼女の差し出した、ひび割れた手鏡を覗き込んだ。
やせぎすではあるが輝いて見えるほど白い肌を持つ男の子がいた。綺麗に短く整えられた髪は黄金色で、午後の太陽の光に色濃く染められていた。元より鮮やかだった青い瞳は、豊かな睫毛に縁どられて一際華やか。唇は程よく膨れて肉感的だった。
私はそれが自分の姿だと認識するのに長い長い時間を要した。彼女があんまり美しい言葉で私を褒めるから、自分もまたうっとりと鏡の中の姿に見とれた。自分の姿に酔っていたというよりは、彼女が褒める言葉に酔っていた。
「お姉ちゃん、ありがとう」
私は丁寧に頭を下げてお礼を言った。彼女もまた嬉しそうに笑うと、私をいきなり抱擁した。心臓が飛び出すかと思った。
「ああ、本当になんて美人さんなんだろう！　姉さん方の中にもこんな上玉はいないわ！　あなただったらすぐにうちの、いいえ、このアメリカで一番になれるのに！」
彼女はまだ興奮のさめやらない様子で私の耳に熱く言った。まだ私を腕の中に抱き、直もうっとりと私の姿を見つめ続けていた。彼女の瞳の中の自分は、やっぱり綺麗だと思った。そして、今目の前にいるこの娘さんも、また美しい人だと思った。傍目から見れば、みすぼらしく痘痕だらけの彼女は、決して美人と呼ばれるような人ではなかっただろう。それでも、私は彼女から目を離すことが出来なかった。まるっきり学のない私であったが、その彼女の姿をいくらでも素敵な言葉で飾り立てることが出来た。赤茶けた髪も、痘痕だけの顔も、スカートの古シミさえも。ありとあらゆる美しさを、彼女は私の心に吹き込むかのようだった。
微笑する彼女の唇がふとしたはずみに自分の体のどこかに触れはしないか、とそんな俗っぽい願望を密かに掻き立てた。しかし、その一抹すらも叶えられることなく、私の最初の出会いは終わりを迎えた。
手押しポンプのすぐ後方にある木戸の奥から、「もう店の時間よ！」と叫ぶ女の声がして、彼女が大急ぎで立ち上がったのだ。
「いけない！　もう行かなくちゃ！」
そう口早に言うと勢いをつけて後ろを向いた。髪の毛先の一束が私の頬を一打ちした。彼女はゼンマイ仕掛けの人形のようにせかせかと木桶やら洗濯板やらを片付け、私に使ったのと同じ櫛で髪を整え、木戸を開けた。
戸の奥に身を消す直前、彼女はもう一度私の方を振り向いた。ほっそりとした首元の線が緩やかに曲がり、流れるような髪が体の半面を覆い隠した。そして最後に柔和な笑顔の、その右目の睫毛の先端に、ほんの少しだけ寂しい色を一滴だけ残して静かに言った。



「それじゃあね、坊や。また会えるといいわね」
それから木戸がせせら笑うかのようにバタンと閉じられ、私は一人残された。しばらく戸をじっと見つめたが、やがてすり足でそこを去り始めた。美しい我が身をそっと抱きしめ、そして夢中で駆けだした。
今の人は何だったんだろう。
そんな疑問がぐるぐる渦巻いて、私はひたすら走ることで体中の熱を冷ますそうとした。
どうしてさっきの人にだけこんなに胸がドキドキするんだろう。こんな思いは母ちゃんにもイーサンにも感じたことがないのに。あの人だけはどこか特別な気がする。なぜ？　一体どうして？
息が切れて立ち止まると、路上で春本を売っている男が目に映った。私は地面に山積みにされた春本の赤裸々な表紙の中に、一冊の変色した古本を見つけた。流麗な飾り文字の下に、綺麗なドレスを着た女性に縋りつく若い青年の絵が描かれている。その時の私には分からなかったが、あれはきっとプーシキンの『オネーギン』だっただろう。プーシキンはおろかロシアのことすら碌に知らなかった私だったが、不思議とその本の表紙に視線は定まった。春本売りの男は煙草をふかしたままうとうと居眠りしていた。
俺を綺麗だって言ってくれた。今までそんなこと言ってくれた人いなかった。母ちゃんでさえ。なのに、あの人は汚かった俺を見ても嫌な顔一つせずに触れてくれた。そして綺麗にしてくれた。
そう思って、私は初めて自分が彼女に恋をしたことを知った。年上で、貧しくて、やせっぽっちで、痘痕だらけの娼婦のあの娘に。
アン。
私は一人、名前も知らないあの人をそう名付けた。そうすることで、もうあの人と結ばれた気がした。
アン。私が唯一純潔でいられたのは、あの人だけだった。そして恋をしていたのも、あの人だけだった。この恋心だけは、彼女を除いて誰にも渡さなかった。

初めて感じる胸の高鳴りが少し落ち着くと、私はようやくひどい痒みや体の怠さが引いていることに気づいた。額に手をやると熱も収まっている。
あ、ちょっと良くなったみたい。
そう分かると、私はみるみる内に人に預けてきたおチビのイーサンに会いたくなって駆け出した。あのふわふわした巻き毛を頬一杯に感じたかった。そして、今日の素敵な出会いのことを話したかった。不思議なことでもないが、見違えるように美しくなったこの姿を見てもらおうという気は起きなかった。
駆けて行く途中、幾人もの人々が私を呆気に取られて見つめていた。
徒党を組む子供達の寝城であるらしい廃工場の石段に、イーサンは少し年上の男の子と並んで座って、しなびた果物を齧っていた。幸いなことに、それなりに可愛がってもらっていたらしい。
私が彼らの前に躍り出ると、隣の男の子は手に持っていた物を取り落とした。しかし、イーサンだけは嬉しそうに「ロバート！」と一声叫ぶと、迷わず私に抱き着いて来た。私は彼の体を腕一ぱいに抱きしめると、優しい声で「おうちに帰ろう」と言った。
イーサンの、垢でべとべとした巻き毛に夢中で頬ずりしていると、首筋あたりに焼けつくような視線を感じた。見ると、イーサンと果物を食べていた男の子を始め、工場の中で寝ていた子供達が皆外に出て、私の顔をじっと見つめていた。小さい子はぽっと頬を赤く染めて、大きい子は意味ありげなにやにや笑いを浮かべて。今までそんな視線を受けたことはなかったから、私は少し不思議に感じた。
お礼をしようと、リーダー格の少年に近づき、ポケットの中の小銭を渡した。
「今までイーサンの面倒見てくれてありがとう。これでなんかいいもん買ってね」
私の差し出したお金を素直に受け取って、リーダー格の少年はしばらくじっと私の顔を見つめた。
「なあ、おめえ、ほんとにロバートか？」
彼はいぶかし気に首を傾げながら聞いた。
「そうだけど？」
「へえ、随分変わっちまったなぁ。なんだかえらい別嬪になったじゃねえの」
それを聞いて、私の心に暖かいものが広がった。思わず「でしょ？」と言いかけたが、寸での所で飲み込んだ。これを誰よりも先に聞くのは、まずイーサンだ。
「いやあ、そんなに綺麗になったんならうちに入れてやってもいいんだけどよ。お前くらいの別嬪がいりゃあ、稼ぎだって増えるしよ」
上から下まで呆気にとられたように見回しながら少年は言った。私はふと不思議に思って聞き返した。
「稼ぎが増える？」
「え、ああ。美人ってのは金になるもんだぜ」
私がしばらく彼の言葉の意味を考えて黙り込んでいると、ふとシャツの裾を引っ張られた。見るとイーサンが「早く帰ろうよ」と言って頬を膨れさせていた。

私はイーサンを連れて一先ずその場を離れた。
家に帰ると、乏しい夕食を取りながら私はイーサンに今日あった出来事を離した。どうして私がこんなにも綺麗になったのか。どれだけ胸がドキドキしたか。そして、初めて会ったあの娘、アンがどれだけ美しく私の瞳に映ったか。イーサンはパンにガブリつきながら、大人しく私の話を聞いていたが、やがて口を挟んだ。
「でもさ、僕、ロバートがそんなに変わった気はしないよ」
「ええ？　いやいや綺麗になったでしょ？　前はすっごく汚くて醜かったのに」
ムキになって言い返す私の言葉に、イーサンはパンばかり見つめて答えた。
「だってロバートなのは変わってないもん」
気づくとイーサンがいつの間にか、私の脇腹にぴったりと寄り添っていた。痩せた両の頬がぷっくりと持ち上がっていた。
「でもそのアンって人、優しくていい人だね。ロバート、いい人に会えて良かったねぇ」

次の日、私もイーサンのことも綺麗さっぱり洗おうと思ってあちこちの井戸から水を窃盗した。ああ、別にイーサンも私のように美しく変えようと思ったわけじゃない。ただ単純に、衛生面が心配になったからだ。
私は万力込めて彼の体をボロ布で擦ったが、長年溜まりに溜まった垢はそう簡単に去ってくれず、とうとうイーサンから「痛いからやめろ」という悲しい通達を食らった。
やっぱり石鹸がいるなあ、と私はすっかり途方に暮れてしまった。
今では安く手に入る石鹸だが、昔のブラフマー街ではなかなかに値の張る物だったのだ。安定した収入のない路上生活者の私達が易々と買える物ではない。アンはきっと気前よく奮発してくれたに違いない。
今の貯金を数えてみても、三分の一にもいかない。盗むという手も考えてみたが、石鹸が売っているのはヴィシュヌ街やシヴァ街だ。警備がもっと厳重だから盗むのも簡単ではない。
さてどうするか。
アンの所へイーサンを連れて行くという手も考えてみたが、そういえば私は彼女の本当の名前を知らない。いつも都合よく洗濯しに外へ出ているとも限らないから、行ったところでどう彼女に会えばいいのやら。それに、何より高いものを奮発してくれたその上に、もう一人にも同じ事をしろと言うのは、いくらなんでも図々しすぎやしないか。もし、彼女にしかめ面されたらどうしよう。そう思うと、どうしようもなく恐ろしくなった。お金は足りない、盗むのも難しい、アンに頼るきりになるのもなんだかな。私はすっかり八方ふさがりになって頭を抱えた。
長いこと考えたが、結局きちんとお金を稼いで買うしかないという結論に至った。
でもどうやって？
物乞いやら使い走りでは大した金額は望めない。だとしたら他に何が？
私は両の頬を手で挟んで擦った。するとどうだ。前まではザラザラして掌の割れ目にチクチクと引っかかっていた皮膚はそこになかった。今の頬はまるで磨きに磨きをかけたテンの皮のように柔らかく滑らかだった。そこで私は今更のように思い出したのだった。
あ、そうか。俺はすっかり綺麗になったんだ。
そしてアンの、あの心地の良い言葉が耳を打った。
「あなただったらすぐにウチの……いいえ、このアメリカで一番になれるのに！」
私はゆっくりと腰を上げた。服を着ながら恨めしそうに私を見るイーサンをあとに残して歩き出した。
ウチの一番。もしかしたら。
私は波打つ心臓を服の上から押さえ、街路をゆっくりと歩いた。
もしかしたら俺にもできるのかもしれない。母ちゃんやアンと同じことが。もっとたくさんお金を貰える仕事が。
私はそこでようやく、昨日あの男の子が言っていた意味を悟った。「美人は金になる」。その意味に気づくと、何だか変に緊張し出した。なんていうかな……、似通った二つの答えのどちらか一つに、覚悟を決めて鉛筆で丸をする時。そんなときの緊張。
ふと気づくと、パンを売る屋台の準備をしている十七、六歳ほどの青年がいた。擦り切れてはいるけれど、明るいベージュのキュロットを履いて、そこそこの暮らしをしているようだった。きっと時々ブラフマーまで商売の足を伸ばすヴィシュヌ街のパン屋の息子か何かだろう。
きっとこんな街での商売なんてしたくないだろうに。押し付けられたんだな。
そう思うと、私は迷わず彼に近づいて行った。初めての客は彼が相応しいと思ったのだ。小麦を相当ケチって焼いたであろう、ぱさぱさした食パンを台に並べていた彼は、私のかけた声に作業の手を止めたりはしなかった。
「うるさいなぁ。物乞いならあっちへ行っちまいな」

そう吐き捨てるように言うと、彼はバゲットの籠を音高く台の左端に置いた。必然的に左を向くことになった彼の目に、私の姿がはっきりと映った。彼の眼球を覆う瞼が勢いよく跳ね除けられ、球に映っている私の全身がぐにゃぐにゃと曲がっているのが良く分かった。

「お兄さん、俺のこと買ってくれる？」

と、私は無い知恵を振り絞り振り絞り、上ずった声で言った。彼の頬を、汗が二滴滑っていった。しばらく黙りこくった後、彼は私を近くの建物の暗がりへと連れて行った。

私が石畳の地面へ寝る直前、彼は脱いだジャケットを丸めて私の頭の下へ差し入れてくれた。そして思い切って、私の服の襟もとへ手を伸ばした。二の腕を掴んでいる手がブルブルと震えていた。

ふと顔を横に向けると、名前は分からないが茎の強かな花が一輪、意志の割れ目から伸びて咲いていた。葉のたっぷりとした、いかにも図々しそうな花だった。花弁も分厚く、どっしりとしてその重みに花もろとも下へ傾きそうだった。

地面がズルリと私の背を擦った。私の背と地面は幾度となく摩擦を繰り返した。もう一度横を見ると、花はとうとう頭の重みに耐えきれずガクリと項垂れてしまっていた。初めてのセックスは痛くも辛くもなかった。汗だくになっている青年の顔を見ても特別不快には思えなかった。しかしなぜか、項垂れた花を見ると、どことなく嫌な感じがした。

十五分ほどして、私は全身の力を抜くことが出来た。当の彼は私から少し離れた位置に腰を下ろし、肩で荒い息をしていた。しかし、すぐに私の方を向くと何やら言い訳でもするみたいに「ね、君いくらだい？」と口早に言った。

私はすっかりお金のことを忘れていたので少し焦ってしまった。（あ、そうだ、お金！）と心の中で注意を促したが。口では全くズレたことを言ってしまったのだ。

「パンを二つ、あ、後ミルクを二個ちょうだい」

彼はそれを聞くと、「え？」と間の抜けた声を出した。しかしすぐに立ち上がり、自分の店の方へ駆けて行った。彼が戻るまでの間、私は服も着ずに寝転がり、自分のアホさ加減に顔を覆っていた。

ドチキショウ！　なんで金を強請らなかったんだよ！　これじゃ石鹸は買えねえじゃねえか！　と、自分を罵倒した。そこでようやく、自分の腰がずきりと痛んだ。

彼は言われた通りの物を抱えて戻って来た。上等な城パン、きちんと瓶に入った真っ白な牛乳。彼はそっと私の腕の中に、その二人分の食料を抱き下ろしてくれた。パンは今まで恵んでもらったものや盗んだものと、少しのお金で買ったものとはまるで違っていた。ふかふかして温かく、何よりも真っ白。牛乳も同じだった。とてつもなく美味しそうで、夢に描いたどんな美酒美食よりも食欲をそそった。私の中から、お金を強請らなかったことの後悔がすっと消えていった。

これ、俺が稼いだんだ。

ゾクゾクと嬉しかった。俺が稼いだんだ。汚かったこの俺が。自分の美しさ、自分の力で。

私は突っかけるように服を身に着けると、心のままに駆け出した。彼にお礼すら言わなかった。イーサンが心配して待っているだろう家にも真っ直ぐ帰らず、ブラフマー街の街路を縦横無尽に駆けまわった。

ただただ嬉しかった。嬉しくて嬉しくて堪らなかった。自分の手で体を汚したのにも関わらず、ただもう嬉しくてしょうがなかった。

なんだできるじゃないか！

と、胸の内で叫び続けた。

できるじゃないか、俺にだってできるじゃないか！　そうだ、俺は綺麗になったんだ！　もう腹ばっか空かした、汚いガキじゃないんだ！　もう何でも出来るんだ！　何だって手に入るんだ！　石鹸も服も、缶一ぱいのチョコレートも！

今までろくな栄養も摂れていなかった足は、まるで爽やかな草原を思うまま走る馬のように軽やかで力強かった。一足踵に力を入れれば、あのヴァルナのビルさえ飛び越せそうだった。

何だって出来る気がしていた。どんな夢だって叶えられる。そんな風に。

ようやく家に帰った頃には、太陽は天の中腹から三十度ほど傾いていた。

石鹸を買えなかったのは申し訳ないが、しかしイーサンはそんなことは気にも留めず、私の手の中の白パンを見てたちまち顔を輝かせた。こんな上物を誰かに盗られはしないか、と思ったのか、イーサンはいつになくせっついてガツガツと大急ぎで貪り食った。私はのろのろと一欠けらずつ手でちぎっては口に入れ、一噛みごとに「うまい、うまい」と呟いた。

私は牛乳を飲みながら、イーサンに今日の仕事の事を話した。

「じゃあこれからはまいんちお金貰えるの？」

と、彼は嬉しそうに言った。

「うん！　これからは何だって買えるよ！　パンもミルクもお菓子も！」
何年も夢見てきた甘い甘いお菓子。噂に聞くだけだったチョコレートやチーズケーキや、ひんやり冷たいアイスクリームが夢でなくなることを想像すると、口の中に涎がじんわりと溜まった。
やがてとてつもない疲れが足先から頭へと昇りつめ、次の朝日が昇るまで、静かに安らかに眠り続けた。

夜が明けると、私は早めに起きて働きに出かけた。どんな男も青年も少年もとても簡単で、相手を見つけるには苦労しなかった。次はきちんとお金で払ってもらった。あまりにも高い額は要求せず、三十分ごとに相手を変え、一人ずつ少しずつ貰ったお金でポケットを重くしていった。
その日のうちに、私はラベンダーとハーブの綺麗な石鹸を、ヴィシュヌ街で買うことが出来た。夕暮れの光の中、私はイーサンを徹底的に洗い上げた。私と同じ抜けるように白い肌が現れ、黒い巻き毛も私のブロンドと同じようにツヤツヤと輝いた。肌の香りだけが私と違っていた。髪も肌もすっかり綺麗になったイーサンは、しかし不思議なことに以前とあまり変わりはないように思えた。
石鹸を買ってもお金はまだ残っていた。昨日のミルクの残りを地面に捨て、その瓶の中にお金を入れてとっておいた。
初めての贅沢はそこから始まっていったのだろうか？私が本当の豊かさを感じ始めたのは、きっと野菜のクズや鳥の足がようやくゴミになり始めた頃だ。

朝な夕な売春に出かけた。私の噂はブラフマー街からやがてヴィシュヌ街へと流れ出ていった。お客もきちんとした労働者が増えていった。体を売るのは、そうしょっちゅうだとさすがに疲れるが、とは言え屋根の下で眠れることもあったし、イーサンも一緒に温かいご飯を食べさせてもらえるし、いいこともそれなりにあった。
食べ物もマシになった。白パンや牛乳に大した魅力を感じなくなり、燻製肉やチーズや温かいスープを当然のように口にすることができ、四か月経つ頃には砂糖を丸々一個使った白いお菓子を初めて口にすることが出来た。あの時の甘い味が忘れられず、今でも私とイーサンは甘いスイーツに目がない。
私とイーサンは次第に肌ツヤも肉付きもいい評判の美少年へと育っていった。とりわけイーサンの成長ぶりには目を見張った。背丈はぐんぐんと伸び、元から敏捷だった体に力が与えられ、喧嘩やかけっこではその持前の運動神経で悪ガキ共を打倒した。対して私は情けないことに、栄養を取るのが一足遅れたせいか、十二歳を過ぎてもものろまで貧弱で、喧嘩になれば申し訳程度の雄たけびを上げながら訳の分からない方向へ拳を突き出し、挙句の果てには悪ガキ共が同情して「まあ、お前には他にいいところがあるよ」と私を慰める始末だった。

私とイーサンは十二歳と六歳の誕生日を小さなカップケーキでお祝いすることができた。来年は丸々一個の生クリームのケーキに蝋燭を立てようと誓った。もうそれすら、夢に見ることではないのだから。
でも、もちろんいい事ばかりではなかった。私の職種が男娼として定着してしまうと、素行の悪い客が増え始めた。
或る昼下がり、イーサンが遊びに出かけた後の掘っ立て小屋でぐうすか昼寝をしていると、知らない中年男が一人小屋に押し入って私を好き勝手した。一言くらいなんか言えよ、と不満に思ったが、まあお金がもらえるならいいか、と私も大して抵抗しなかった。ところが、そいつはついぞ揚げ代を払わなかった。私が何度言ってもポケットを探る素振り一つ見せず、帰り支度を始めたのだ。
私のギャアギャアうるさい声に堪り兼ねたのか、やがて男は「金なら持ってない」とおっしゃった。その、まるでズボンを引っ張り上げる動作のついでだと言わんばかりの軽い口調に、私は全身の血をカッと頭に昇らせた。
「はあ⁉　金がない⁉　ふざっけんな、じゃあなんでやりたがった！　払えこのコンチキショウ！　払えったら払え！」
私は男に掴みかかった。形だけでなく本気でだったが、男からしたらただの形だった。指の関節が頬骨に与えた一撃で私はノックアウトした。白目を剥いたが何とか意識だけは手放さなかった。その代わり、背中を強く地面に打ち付け、痛みのあまり起き上がれなくなった。
去り行く背中を鼻筋越しに睨みつけながら、私はありとあらゆる罵詈雑言を浴びせ続けた。効果なしと分かると次は手足をバタつかせながら泣き喚いた。買われなかったことが悔しかった。あれほど胸をときめかせたアンとの思い出も、一緒に汚された気がした。もう貧弱なだけの子供じゃないんだ、俺はもっとお金の稼げるやつになったんだ、と思っていた誇らしさも踏みにじられた気がした。そして、何年にも渡り私とイーサンを守り続けてくれた掘っ立て小屋の天井が、唐突に憎らしくなった。

「役立たず！　役立たず！」
そう声が枯れるまで怒鳴り散らした。
イーサンは夕方に、そこらへんで拾ったピカピカの綺麗なガラス片をおみやげに帰って来た。彼は何とも無様な私の様子に銃を向けられるマドリード市民のような顔をし、すぐに私を助け起こしてくれた。
「大丈夫、ロバート⁉」
と、泣き声交じりに言い、小さな体を精一杯引き延ばして私の頭を抱いた。暖かい唇が何度も私の頬の傷跡に触れた。イーサンにキスされていると、もう泣いたり喚いたりする気力は自然になくなった。代わりに、私は上を見上げることとなった。視線は掘っ立て小屋の屋根を貫き通していた。
まだまだ足りないんだ。こんな街に生きている限り、俺は最初と何も変わらない。

三日間の断食が始まったのは、私がレイプされた翌日だった。水だけでお腹を膨らまし、ひたすら体を売った。イーサンも一生懸命物乞いに勤しんだ。そして大切な貯金の入った牛乳瓶を手に、私とイーサンは真っ青な顔をしてヴィシュヌ街のほとりにある寂れた安いアパートの一室を借りた。
初めての屋根付きの家に私とイーサンは空腹も忘れて大興奮した。壁紙にも床板にもひびが入っているが、調理ストーブも洗面台も揃っていて、あの掘っ立て小屋と比べれば十分豪邸だった。私が母ちゃんと過ごした娼館よりも充実していたと言える。街の階級が一つ上がるだけで、「安い」の意味は変わってくるようだ。
しかし、いいところに住めたらその分だけやはり苦労は付いて回った。ブラフマー街で体を売っていた時よりも、食事は格段に貧しくなった。何せ家の中で暮らすには食費以外にも出費がある。水道代、家賃、ガス代。水を使うのにお金がかかるなんて知らなかった。これから毎日お風呂に入れる！　と喜んだのも束の間、水道料金の請求書を見て私は卒倒する羽目になった。とはいえ、また汚くなってしまっては元も子もないので、三日に一度は体を拭くようにはしたが。
出費のせいもあって、私は過去一番猛烈に働きだした。何十夜働きづめでも、どんなにひどい扱いを受けようとも、お金がもらえるなら何でもよかった。錆びだらけのガスストーブに、貧相なベッドに、染みだらけのカーテンに、私は必死でしがみ付いた。息一つ吸うだけでじゃらじゃらじゃらと流れ落ちていくお金の音を聞きながら、その中で歯を食いしばって息を止めた。大変な生活だったが、それでも辛いだとか惨めだとか、そういう気持ちにはならなかった。無意味に生きていた小さいころと違って、私はひたすら夢中だったのだ。切り開いた自分の道を、無我夢中で走っていた。ただ一つ、ほんの、ほんの少しだけ、ちょっとだけ何かを諦めてしまったかのような気持ちになる時があった。イーサンと夕食を囲む時。その時だけ、あのボロを着て痘痕だらけの顔だった、明るい瞳のアンを思い出した。アンの微笑が、私の作った下手なスープにガブリつくイーサンの笑顔に重なった。そんな時だけ、ほんのちょっぴり、何か忘れ物をしたような気持ちがした。

雨がひどく振る日は、客の一人に強請って買ってもらった小学生向けの教本で、読み書きや計算の勉強をした。これは売春やら金稼ぎ云々やらに関わるというよりは、さすがに十三歳にもなってＡＢＣも分からないようじゃ困る、という焦燥感に駆られてのことだった。しかし、一人ではとても理解できなかったので、アパートの近所に住む小学生達に助けを借りることにした。
「えー、びー、しー、でぃー、いー、えふ、じー」
と、彼らに教わったように、きらきら星のメロディに合わせてアルファベットを口ずさんだ。小学生達はよい先生だった。教室で教わるよりもずっとおもしろく、分かりやすく勉強を教えてくれた。初めて間違えずに「Ｒｏｂｅｒｔ　Ｃｒｏｓｓ」と書けた時も、詰まらずに九九の八の段を言えた時も、彼らは一緒に喜んでくれた。彼らの親は私のことを嫌っていたようだが、あくまで彼らにとって私は「ちょっと手間のかかるお兄さん」だった。自分の勉強の為に彼らの純粋な気持ちを利用したと言われればそれまでだが、それでもあの頃は楽しかった。
しかし、どれだけ努力しても上達しないものも中にはあった。筆跡だ。スペルも文法も間違えずに書けるようになったはいいけど、私は一向に綺麗に字を書くということができなかった。私の汚い字ときたらミミズがのたくったならともかく、ミミズがチャールストンでも舞い踊ったとでもいう所だろうか。この悪筆はこの年になるまで治らなかった。だから今でも直筆署名は苦手なんだ。歯と同じように、ここにも貧乏暮らしの名残が残っている。
自分の勉強がある程度済むと、次は私がイーサンに教える番だった。さあ、困ったのはこのイーサンの勉強嫌いだ。彼はアルファベットはおろか、自分の名前の綴りを覚えるのさえ嫌がって「こんなのつまんない」と愚図りきった。鉛筆を持つのもノートを広げるのも生を受け

てから初めてのイーサンを一生懸命おだて、なだめ、叱りつけて机に縫い留めていた。
「リズムに合わせて一、二、三、ハイ！　A、B、C、D、E、F、G！」
「えー、びー、しー、でー、えー、えー……」
「F、G！　ディーの次はF、G！　分かった⁉」
こんなやり取りが何日も繰り返された。
間違えずにアルファベットを書けるようになるまで夕食はなしという残酷な通達を食らったイーサンが恨みがましい目でねめつけてくるのを感じながら、私は教本の代わりに次は料理本を開いていた。それも、ソクラテスの哲学書でも読み解くような顔で。
私達の銀行である、イワシの酢漬けか何かが入っていたブリキ缶は、日の出の事に重量を増していった。稼ぎは私の売春用の他にもあって、成長したイーサンの分も含まれていた。
君はとりわけイーサンのことをよく聞きたいんじゃないか？
あの子は手先が生まれつき大変器用だった。細かい物を扱うのが得意だった彼は、アパートの隣の部屋に住んでいたお針子娘から裁縫を習い、それからメキメキ腕を上げていった。女の子向けのかわいい物が大好きだった彼は、お針子娘から道具や布を借りてよく髪飾りやコサージュなどを作った。それが近所の女の子や奥さんから好評で、お金を出すから譲ってほしいという声が多数上がった。男の子があんまり女の子趣味なのは困りものだが、とは言え本人は楽しんでやっているし、何よりお金がこれで工面できるなら丁度いいや、と私は彼の誕生日に小さなソーイングセットを買ってやった。自分専用の商売道具が手に入るとイーサンは大喜びで午後一ぱい裁縫の練習ばかりしていた。勉強嫌いでも好きなことには一生懸命になれるらしく、採寸に必要な算数だけはまじめに取り組んだ。そんな楽しい努力のおかげで、彼は十歳になるかならない内に立体裁縫を習得した。イーサンが今やジョゼフィン・ベーカーのドレスを縫えるのも、このころの経験があってこそなんだ。
それから、君に一言言っておいた方がいいことがある。私はイーサンに体を売らせたことは一度もない。確かに、彼が傍から見て見目のいい少年なのは確かなようだが、彼自身にあまりやる気がないのと、彼の美しい見た目が男向けでなく女の子向けなのが影響して、イーサンは一度も男に体を預けたことはなかった。私自身も、洋裁だけで必要な稼ぎをくれるから、わざわざ勧めたりもしなかった。
あの頃の私は、固い地面に寝転がって足を押し広げられるのを、惨めだとか不憫だとかは思わなかった。
話を戻そう。こうしてブリキ缶の中には二人分の紙幣が入り始め、そうした頃にはもう固い寝床も、あの掘っ立て小屋も、鳥の足も遠い思い出だった。
服をたくさんプレゼントしてもらったこともあったっけ。依頼されたものの材料を買うともうお金が足りなくなるので、イーサンは自分や私の服を作ることは出来なかった。しかしある夜、客として私を買った男の一人が、私のみすぼらしいほとんどボロ布のような服を見てため息をついた。彼はその夜何もせず帰ったが、また別の夜に私を買った。手土産に木綿の大きな袋を担いで。中を開けて見ると、大小それぞれのシャツやらズボンやらジャケットやらネクタイやらセーラー服やらが入っていた。
「死んだ二人の倅のもんだ」
と、彼は吐き捨てるように臭い煙草を吸いながら言った。
「古着だがそのボロ布みてえな着物と比べりゃいい方だろう。倅のことを思い出すと辛いから貰ってくれ。お前んとこのチビの分もある」
彼からもらった服はまだ部屋の衣装箪笥に残っている。私もイーサンももう着られないがね。だけど、服に染みついている深い酒の匂いを嗅ぐと、どうにも捨てられなかった。

イーサンと過ごしたヴィシュヌ街での日々がそれから三年続き、気づけば私は十六歳になっていた。何が起こるわけでもなく、何が欠ける訳でもなく、ただただ穏やかな日常ばかりだった。
私が作った朝食をイーサンと食べて、お日様が真上に行くまでに二人で勉強する。午後から私は洗濯や掃除や買い物に勤しみ、イーサンは仕立物。時々近所の子供達と遊び、安い材料で作るおやつを振舞い、イーサンはまた、女の子のために人形のドレスや模造ダイヤつきのリボンや取り外せるレースの裾飾りを作る。夕食のスープの後に私は稼ぎに出かける。月が一番明るいうちに帰って家計簿をつける。最後にイーサンが眠るベッドにもぐりこむ。そんな毎日が繰り返された。
まだ十五、六歳の少年だった私には。まだこんな高い塔の一室で疲れ切った顔で違法の酒を飲む生活など考え付きもしなかった。ただ平凡な毎日だけで十分贅沢だった。それが凄まじい欲望に駆られ、険しいサバイバルレースに走り出すきっかけとなったのは、ある日曜の午後だった。

ある昼過ぎ、作りかけのブラウスが待ち針だらけの状態で机に放りだされているのを見つけた。「針を出しっぱなしにしたら危ねえだろ！」と家の中で怒鳴ったが返事がない。さてはアイツ、仕事をほっぽり出して遊びに行ったな、とため息交じりに思い、彼を叱りつけようとアパートの外へ出た。案外イーサンはすんなり見つかった。アパートの眼前にある道路に、ここらあたりでは見かけない、綺麗な二頭立ての辻馬車が停まっていた。イーサンはその馬車に繋がれた栗毛の馬と戯れていたのだ。近づいて行くと、彼はたちまち顔を上げてにっこり笑って言った。

「見て見て、ロバート！　本物のお馬だよ！　かわいいねえ！」

私は怖い顔をして「馬がなんだってんだ！　仕事もしねえで！」とぴしゃりと言ってやろうとしたが、たちまちその馬車の豪奢な装飾に見とれ、口を閉じてしまった。私だって房飾りでいっぱいの馬やら、キラキラ輝く赤い装飾だらけの馬車やらを見るのは初めてだったのだ。

しばらくすると、向かいの煙草屋から二十歳よりも少し上くらいかの年の青年御者が、巻煙草を咥えて戻って来た。怒られるかな、と私は咄嗟にイーサンを抱き寄せたが、青年は根っから友好的に出来ているのかにっこりと私達に笑いかけた。

「俺んとこの馬と遊んでくれてたのかい？　そうなの、そいつはありがたいや！　こいつらは小さい子供が好きでね、構ってもらった後は走りがいいんだ！　お礼にちょっと乗せてあげようか？」

と言うと、青年はすぐに御者台に飛び乗った。イーサンがたちまち顔を輝かせてしきりに私の手を引っ張るので、私も大人しく彼と並んで赤い革張りの席にちょこんと収まった。青年が一打ち鞭を振るうと、馬は小粋に駆けだした。

上下に楽しくスイングする馬の鬣を見つめながら、私は初めての馬車の振動に揺られた。体を馬車の窓からいっぱいに乗り出しているイーサンを懸命に抱きしめた。気のいい青年御者が肩越しに振り向き、正面の窓を開けて気持ち良く笑った。

「なんだ君達、馬車は初めてかい？　そうかそうか、楽しいか！　こいつはご高貴な方も乗せる一等いいものだから、乗り心地最高だろう？　そうだ、どうせだったらシヴァ街まで連れて行ってやろうか！　立派なもんだよ、あの街は！」

イーサンがきゃっきゃと笑った。私は未舗装の道路がもたらす大嵐のような揺れで吐きそうになりながら礼を言った。

青年が子気味よく歌を口ずさみ始める。「アロハ・オエ。アロハ・オエ。木陰に立つ私の素敵な人。別れの前にどうぞ優しく抱きしめて。また会えるその日まで」。馬の鬣に付いたベルがリンリンと鳴っていた。振動で泣き叫ぶような喧しい音を立てていたベルは、次第に眠たげに鎮まり始めていた。私の吐き気もなくなっている。

石造りの車道は車輪の滑りも滑らかで、整然として美しい。遠くから楽士の奏でる音楽が耳に届き始める。

うるさかったイーサンが、少し静かになっていた。私は危うく腕を緩めてイーサンを落っことしそうになった。

初めてのシヴァ街だった。

あの時の私の気持ちを、君なら分かってくれるだろうか。若く、未熟で無知でバカな私が見たものはそれも大きくて眩くて美しくて。私はただ何も言えず、ひな鳥のようにぱっくり口を開けて目も飛び出さんばかり、それでも心だけが忙しなく打ち騒いだ。

車輪のすぐそばの石畳を、長い裾が滑っていく。モスリンの緑色のドレスだ。女達の腰は見たこともないほど括れ、巨大な帽子には鳥のはく製が載っている。男達は皆黒づくめでクロックコートやシルクハットが太陽の光線を受けて煌めく。コーヒー店の店先で、そろいの仕着せを着た楽師たちがアンサンブルを奏でている。私達の馬車のそばを、両手にキャンディを持った清潔な子供達が走り抜けていく。前を馬のない馬車、自動車がにぎやかに走っている。巻き毛にリボンを一ぱいに着けた子犬が、貴婦人の手に引かれている。

ここに俺の知っている物は何もない。そう思った。

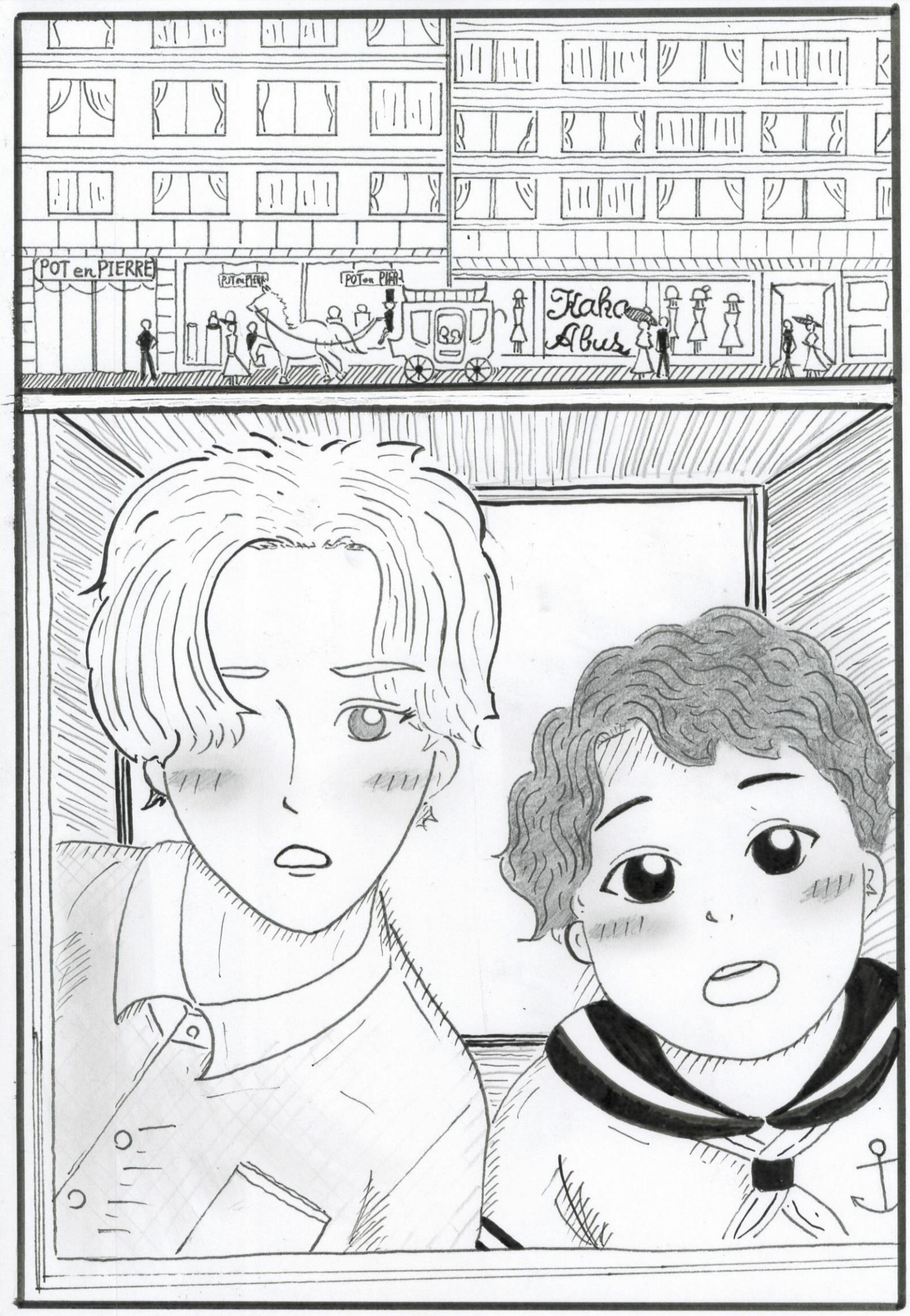
この街には花売りの少女も噛み煙草の吐き汁も、洗濯女が怒鳴る声もない。煙草の煙の香りも違う。

馬車は進んでいく。美しい通行人は誰一人、美しい私やイーサンに足を止めたりはしなかった。私は少し顔を俯け、一際強くイーサンを抱きしめた。

宝石店、時計店、レースの下着屋、華やかなドレスを飾ったショーウィンドウが私の両脇を滑らかに流れて行った。急流に流されている気分になった。

もう何フィート走ったところだろうか。ふと突然、一つの巨大な影がすっぽりと馬車を覆った。イーサンが熱の籠った吐息をふっと吐いた。見上げると影の正体が分かった。道路の突き当りに悠然と腰を据えた鋼鉄のビルディングが、その巨体を反らしてじっと下界の私達を見下ろしているのだった。

「ああ、あれかい？　ありゃあヴァルナ社の根城のビルだよ。大きいだろう？　でも君らみたいないい子は近づかない方がいいぜ。あそこにいるヴァルナの連中は昔か


POT en PIERRE
POT en PIERRE
POT en PIERRE
Haka
Abus

ら悪い噂が絶えなくてね。関わらないのが賢いよ」
青年御者は優しく諭すように言った。私は聞きながら、悲鳴をあげる項をそのままに上を見続けた。これが。これがあのビルなのか。ゴミ溜めの中でいつも太陽の光を浴びて煌めいていたあの巨大なビルがこれなのか。
直線型のビルは、私の目にはぐねりと体を折りたたみ、窓という窓を糸のように細めてニヤニヤ笑っているように見えた。私は己の身が縮んでいくように感じた。ぐんぐん小さくなり、やがて服をすり抜け、イーサンの体を抱いている腕もなくなり、彼はやがて馬車の外へと身を落とす。
ふと、イーサンの日向のような歓声が私の項を救った。彼はビルではなく、右側の歩道を歩く婦人の見事なレース織りの日傘に夢中になっている所だった。

アパートの前で青年御者とは、お礼にシロップ漬けの杏子を一瓶渡して別れた。夜、イーサンは興奮したおかげか早々に眠りについた。私は一方、いつまでも天井を見上げていた。
目を閉じても開いても、あの街の煙草の香りが香水が絹のドレスの裾が、そして鋼鉄の塔が胸に昇ってくる。誰一人私を見染めた人がいなかった、と思い出される。
体を起こして見渡せば、ひびの入った天井に、汚い壁に、床に置かれたバケツと雑巾が目に入る。
俺はあの時、この家の一体何にあれだけウキウキしたんだろう。
何度も寝返りを打つうちに、私はふとアンのことを思い出した。
どうして会いに行かなかったんだろう。
体を起こして自分の体を抱きしめた。
どうして。あんなに好きな人なんだから、会いに行けばよかったのに。どうして今までそうしなかったんだろう。
あの日初めて会ったアン。あの時はどんな問題にもならなかった彼女の垢じみたブラウスやスカートや木靴が、今夜は嫌に鮮やかに思い出された。そして視線を下に向ければ、白く滑らか、それでも香しい香りは一向に漂って来ない私の体があった。
恥ずかしかったんだろうか。俺が？　それともアンが？
ふと私は、今日見た貴婦人が着ていた白地に紫のストライプが入ったドレスをアンに着せてみた。頭の中で彼女はたちまち花の開くように笑い、たっぷりとした裾をつまみ上げる。踵の高い靴を履いた小さな足が、レースの陰から少しだけ顔を出す。
私は急に足の間に熱を感じてシーツに擦り付けた。背は汗に濡れ血が勢いよく脈打つ。ちょうど初めて地に寝転がったあの時と同じ心地だった。
もう俺には十分じゃないか。
私は何度も言い聞かせた。
そうだ。これ以上何を望むことがあるか。残飯を漁って地面に寝ていた頃と比べりゃ、今は温かいものが食えるしベッドにも寝れる。読み書きだってできるようになったし、お金だって全然ないわけじゃない。このままイーサンを立派な若者に育てて、気立てのいい娘と結婚させてやることだってできるはず。そうだよ、もう十分じゃないか。このままでいいじゃないか。この幸せな俺のまま、アンに会いに行って思いを伝えればいいじゃないか。
私はアンと結ばれて子供達に囲まれて笑っている様子を思い浮かべた。それでもその光景に、豪奢な絨毯が、美しい白木の小卓が、華美な衣装が混じり始める。それと同時に、地面に投げつけられた小銭を這いつくばって拾い集めたあの日が、金も払われずに体を好き勝手されたあの日が、取られまいと乏しいパンをガツガツ貪り食ったあの日が苦々しく思い出された。どうして今までアンに会いに行かなかったのか、ようやく分かった。
俺はどこかでまだ自分を恥じていた。人々の口にうっすらと聞いたシヴァ街、どこからでも見えたあの威厳たっぷりの塔を見つめながら。その夕食のスープの下に揺らめいていたそんな恥ずかしさが、羨望が今日あの馬車の上で視覚となり、今このベッドの上で言葉となったのだ。
私は上へ上へと伸びる長い階段に足を半分かけているのを感じた。頂に何があるのか分からないが、ひどく見てみたい。登ってみたい。もし俺にそれだけの力がないのなら引き返そう。だが、それができないこともないのだ。
「チクショウ」
そう小さく口に出すと、穏やかな寝息を立てていたイーサンの体が一瞬震えた。
「チクショウ、チクショウ」
食いしばった歯の奥から私は唸った。目の前に吊るされた何かにようやく気付けた。それを知らず知らずの内に夢中で追いかけていたことも。そして俺の目の前に何かを吊るし、俺の尻をおもしろがって叩いている何者かに無性に腹が立った。
ああ、やっぱりまだアンには会えない。目の前に吊るされたものを引きちぎるまでは。

「何が十分なもんか！」
次は声に出した。
「何が十分なもんか！　あれだけ辛い思いをして手に入れたのはまだほんのこれっぽっちじゃねぇか！　まだ何もできてねえじゃねえか！　チクショウ、チクショウ！　俺はいっつもそうだ、見上げてばかりだ！　もう嫌だ！　やってやる！　絶対に手に入れてやる！　あの街に住むことも、人にバカにされないことも、アンも！　みんな手に入れてやる！」
朝が来ると、まだすやすやと穏やかに眠っているイーサンを強く揺すり起こした。
「さあ、いつまでも眠ってないで、早く勉強の準備をするんだよ」

思い返せば、私はようやく汚れ始めた。売春をした時はまだ純真だったのに。人間体を売ったくらいではまだ汚れたとは言わんのだ。心を売り渡してしまって初めて汚れるのだ。
私は客に商人を増やした。甘えた声で「ねえ、いつもどんなお仕事なさってるの？　教えてください」と言い、商売のいろはをそっと教わり覚えていった。
マフィア界の連中と関わりを持ち始めたのもあの頃だった。私は教わった商学や話術を駆使し、麻薬や三文物品の転売をマフィアの連中から任せてもらった。これが結構上手くいって、稼ぎも大層なものになった。きっと嘘をつくのに慣れてきたからだろうな。
そして、イーサンが十一歳になった時……。俺は……あの子に銃をやった。誕生日のプレゼントだった。こうも暗黒界とのパイプが太くなると護身用の武器もいるだろう、と思っていたんだ。そんな折、知り合いの一人が小さな軽量の銃をくれた。運動神経の悪い私は無理だろうが、イーサンなら使いこなせると思ってあの子にやった。
イーサンは新しいおもちゃに大喜びして一日中練習していた。手先の器用な彼はすぐに慣れて、五十メートル先にいる人の手に持つグラスだけを粉みじんにできるほどにまでなった。
まだ彼にとって銃はただの遊び道具だった。しかし、あの子は私のせいで、あの真っ白なかわいい右手を汚してしまうことになったのだ。

風の強く吹く夜で、私はいつものように寝台に男を招き入れていた。相手は私より二つ下の十五歳で、毎日毎日働いてやっと溜まった揚げ代で十七歳だった私を買った。揚げ代の他のチップなど期待できなさそうな相手だし、おまけに年下だったため、私の動きはどことなく緩慢になった。それがいけなかったらしい。
彼は突然怒り出して、私の頬を平手で思いっきり殴った。痛みと驚きで、私は思わず悲鳴を上げた。私の悲鳴は彼にもう一度殴られて一度収まった。しかし、彼が今度は白く光るナイフを私の胸に突き立てようとしたので、再び悲鳴を上げた。しばらくシーツの上で揉みあいになった。ナイフが四、五回私の肌を裂いた。
イーサンが部屋に飛び込んできたとき、少年のナイフは丁度私の眼球すれすれを掠め、涙袋を軽く切り裂いていた。私の金切り声に被せてイーサンが叫んだ。
「やめて！　お願い、やめて！」
少年は止まらなかった。今度は私の眼の真上に刃を突き立てようと腕を大きく振った。恐怖と涙で世界がぼやけて見えた。だから、私に最初に届いたのは音だった。そして胸の上に崩れ落ちた少年の細い体だった。
彼の胸から溢れ出た温かい血が私の胸に染み通った。私は切り傷の痛みも忘れて跳ね起き、銃を片手に床に座り込んでいるイーサンの元へ駆け寄った。
彼は黒く濡れた瞳を私に向け、震える声で「あの子死んだの？　撲が殺したの？」と問いかけた。答える代わりに、私は彼の額に何度も接吻し、「ありがとう」と囁いた。
「ありがとう、イーサン。お前のおかげで俺は助かったんだ。ありがとう」
イーサンは私の胸にむしゃぶりつき、長いこと泣いた。
あの子の遺体は知り合いのマフィアに電話をかけて引き取ってもらった。親もおらず、日雇いの仕事で何とか食べていた子だったらしい。あの子を気に掛ける者はよく寝床を共にしていたという子犬一匹だけだったので、イーサンは誰からの指弾も受けなかった。今でも時々思い出す。私の上に被さって、やるせなさと寂しさに燃えていたあの少年の瞳を。

私はイーサンが人を殺めたという事実を徹底的に隠蔽した。あの子はまだ初めて感じた引き金の重さから立ち直っていなかったから。ところが、火元があれば必ず煙が立つ。アパートの隣人が、あの夜私の部屋で銃声が一発鳴ったのを聞いていたのだ。それから少年の遺体が私達の部屋から運び出されるのを見て、（なるほど、隣のガキのどちらかが一発で誰か仕留めたらしい）と思ったわけだ。しかもそれだけではなく、その隣人というのが

マフィアと繋がりのある人物だったらしく、隣の部屋で起きた見事な殺人のことをある有名な犯罪組織に伝えたのだ。

彼らがうちを訪ねたのは、一週間ほど後だった。大変上等なスーツを着た大勢の男達が突然玄関の呼び鈴を鳴らしたもんだから、私もイーサンも驚いて腰を抜かしかけた。しかし何とか冷静に取り繕って彼らを居間に通すと、砂糖のない紅茶を出して心ばかりの持て成しをした。

「この前ここで少年が殺されたようだね。君達の内どちらが仕留めたのかね？」

男の一人が開口一番にそう言った。私は全身の血が凍り付くのを感じ、上ずった声で「そんな！」と叫んだ。

「そんなこと知りません！　何なんですか、勝手な言いがかりはやめてくだせえ！　うちでは誰も死んじゃいません！」

「いいえ」

いきなり冷え切った水のような声が背後からし、驚いて振り返ると、手づから焼いたお菓子を運んできたイーサンが佇んでいた。

「俺が殺したんです」

私は焦って「あ、いや、そんな！」と喘いだが、イーサンは私を無視して客人に「甘いものは」とお菓子を勧めた。

「君がか……。まだ少年なのに随分と肝の据わったものだ。もう少し詳しく教えてくれるかい？」

イーサンはブツリブツリと当時のいきさつを語った。男達は「ほう」「なるほど」「それはそれは」などと顎をなでながら聞いていた。

「なるほど。君はもうその年で立派に銃を使えるわけだな」

イーサンの話は男のこの一言で締めくくられた。やがて彼らは何やら小声で二、三度何か言い交し、今度は私の方を向いた。

「ロバート君。実は私達はこういうものでね……」

渡された名刺を見てみると、このネオンライトタウンでも四番目に勢力のある犯罪組織の名前が書いてあった。

「このように、まあ汚れた生業で生きている者だ。殺しもやる。今丁度私達のボスの命を狙っている不届きものがいてね。そいつを葬らにゃならんわけだが、油断させるために子供を使って殺そうかと色々考えていたところなんだ。ところが平気で銃を使える子供などそう見つかりはしない。そんな時にイーサン君の噂を聞いた。その子の話を聞く限り、寝台で大暴れする人間の心臓を一発で撃ち抜くなど大した腕前だ。大変気に入った！　だからね、ロバート君。君のかわいいイーサン君をどうか一度だけ貸してくれないかね？　さっき言った件を試しにやらせてみたいんだ。それで、もし上手くいったら正式にうちのメンバーに加えたい！　どうかね？」

答えたのは私ではなくイーサンだった。彼は紅茶に砂糖を加えながらポツリと聞いた。

「いくらもらえますか」

「欲しいだけあげよう！　もし正式にうちに下ることになったらさらに増やしてあげるよ！」

私は絶句して隣に掛けるイーサンを見つめた。彼はしばらくスプーンを動かしていたが、やがてお茶を一口飲むと「いいですよ」と言った。男達は手を叩いて喜んだ。

「ただし」

と、イーサンが静かに口を挟んだ。

「もし上手くいったらロバートも一緒に連れてってください。二人一緒にシヴァ街に住めるようにしてくんなかったらやらねえです」

押し黙る私を余所に男達は揚々と頷いた。

「ええ、ええ、構わないよ！　ウチのボスにかけあってあげよう！　いやあ、それにしても承諾してくれてよかった！　ロバート君、ではそれで構わんね？　金曜の十九に迎えに行くから準備しておいてくれたまえよ！」

客人が帰ると、イーサンを膝の上に抱き、必死に彼の決意を揺るがそうとした。私を救おうとあの少年を殺し、怯えて泣いていたイーサンを思うと心配で心配で堪らなかった。それでもイーサンは、いつの間にか大人びて低くなった声で静かに言った。

「大丈夫。心配すんなよ、ロバート。これはシヴァ街に住める絶好のチャンスだぜ？　これを逃しちまったらもうずっとこのアパート暮らしで押しまいになるよ。いいんかい、それで」

彼は私の頬にそっと口づけして、耳元に囁いた。

「ずっとあの街に憧れてたんだろ？　知ってるぜ。あん馬車のお兄ちゃんに連れてってもらったとっからさ。そのチャンスが今掴めるんだ。これでおめぇだって大好きなアンにドレスを着せてやれんだ。大丈夫だって。もう一人殺したんだ。二人目だって変わるもんか。どうせ俺が殺すやつはろくでなしばかりなんだから」

彼の胸に頬をうずめると、薄いと思っていた胸にはいつの間にか引き締まった筋肉が張り付いていた。鋼鉄の鎧のように感じた。

金曜日、いつもより多めの夕食を取ったイーサンは迎えの男達に連れられ、馬車に乗って出かけて行った。私は長い夜をずっと窓辺に腰かけて過ごした。腕で体を抱

き、ぎゅっと目をつぶって（終わりますように。どうか早く終わりますように）と繰り返した。こんな狭い家でも一人取り残されると、空間が痛いほど身に染みた。もしこのままイーサンが帰って来なかったら。独りぼっちで取り残されてしまったら。そんな嫌な予感が次々と私を苛んだ。

あの時貧しい子供時代以来初めて、私は神様にお祈りした。あの夜誓ったシヴァ街への欲望も、一時完全に忘れていた。

イーサンは夜明け前に帰って来た。

「上手くいったよ」

と、にっこり笑う彼を見て、私はへなへなと床にへたり込んだ。凄まじい安堵で涙が出そうになったが、後ろに男達がいるので何とか歯を喰いしばって耐え、彼らを家に上げて酒をふるまった。イーサンには「お風呂を沸かしてあるから入っておいで」と言い、席を外させた。

「いや、非常に素晴らしかった！」

彼らはグラスに口もつけず、興奮気味に喋った。

「あの何事にも物おじしない態度！　抜群の腕前！　ええ、あの子はたった一発で仕留めましたとも！　相手は呻き声一つ上げる暇もなかった！　よし、正式に採用だ！　ロバート君、君も一緒だ！　礼金は後日改めて渡すからね！」

「やったね」

と、背後から声が聞こえた。見ると、湯上りのイーサンが微笑んで立っていた。

「夢がかなうね、ロバート」

その日の残り少ない夜、私が寝台で眠っていると、隣に寝ていたイーサンが突然むくりと起き上がった。彼は無言で私の上に覆い被さると私のパジャマのシャツのボタンをはずし始めた。シャツが脱げ、白い胸が露わになると、彼は私の乳首に唇を寄せ盛んに吸い始めた。

「ロバート、俺のこと好き？」

彼は顔を上げ、濡れた唇でそう聞いた。丸くぱっちりとした大きな瞳が、窓からうっすら差し込む日の出の光に、妙に輝いていた。

私は胸をはだけて横たわったまま、何も答えなかった。イーサンはもう一度私の胸に顔を寄せた。肌に触れた頬がしっとりと湿っていた。

私とイーサンが初めてシヴァ街に移ったのは、それから一週間後だった。長年住んでいたアパートを引き払い、私達は初めて自動車に乗った。あの日、馬車から眺めた景色が自動車の窓の外に、とてつもないスピードで流れて行った。違うのは、もう手を伸ばせば触れられる位置にあるということだ。

与えられた部屋に、私とイーサンは今までのことも忘れて目を輝かせた。床にも壁にもひびなど一つも入っておらずぴかぴかに磨かれ、自分の姿が映るほどだった。壁紙は明るいグリーンの唐草模様、床は白木張り、天井には桃色の電球の小さなシャンデリア、二つ揃ったベッドは体が沈むほどふかふか。バスルームも洗面所もトイレも一緒についていた。

私は真っ白なシーツの上に寝転がって、死んだ母や赤ん坊のイーサン、そしてあの日のアンのことをひっそりと思い出した。

イーサンは幸いに、先輩やボスに非常に可愛がられ、毎日つきっきりで射撃を教わり、正式に立派な暗殺メンバーの一員となった。あの子は一か月足らずでボスの護衛やメンバーの手伝いの仕事を任せられるようになった。

さて対して私は何をしていたかと言うと、皿洗いや洗濯、床や靴を磨く仕事をどっさり与えられた。

まあ、驚くだろうな。確かに男達に一夜の慰めくらい提供してそれを仕事にしようと目論んでいたわけだが、私だって何でもかんでも思い通りにできるわけじゃない。このマフィア集団のメンバー達は、どうしても私がたらしこめない男ばかりだった。ボスを始め、メンバー全員が大変な愛妻家だったのだから。

特にボスのウィリアム・スカダーは私をひどく毛嫌いしていた。どうやら私を、マラソン一つ満足にできないくせに男と寝るだけで楽に金を貰っている性根の腐ったクソガキと認識しているようで、そんな風に自分を嫌っている人間をたらしこむなどいくら私でも出来る訳がない。それでなくとも、彼は重い病を患っているただ一人の妻に、この上ない愛情と忠誠を捧げているのだから。

とはいえ、私は皿洗い係でも洗濯係でも一応対して不満はなかった。確かにスカダー氏にちくちく嫌味を言われるのはカチンとくるし、まるで雑用係かのような扱われ方には少々腹が立つが、とは言えブラフマー街の汚い路上生活者だった私がシヴァ街の一等地で美しい部屋を与えられているというだけで高い買い物だった。あまりに早い出世ぶりに、我ながら呆然としていたと言えばそうかもしれない。それに一応給料は十分貰えるし、街にも自由に出入りできる。何より、スカダー氏には嫌味を言われるが、彼の妻であるスカダー夫人は面倒見がよく優しい女性で私もイーサンも彼女に懐いていたのだ。ス

カダー夫人はいつも私を夫から庇ってくれた。イーサンと私にこっそりお菓子をくれたこともあるし、いつも頭を優しく撫でてくれた。雑用係でもしばらく不満がなかったのは、夫人の思いやりも少し関係していたのだ。それにスカダー夫人はスカダー氏と深く愛し合っていた。普段の厭味ったらしい顔が嘘のように優しく微笑んでいるスカダー氏に寄り添う夫人を見ると、あまりスカダー氏のことも憎く思えなかった。色仕掛けで誑し込む気だって毛頭なかった。心のどこかで、スカダー夫妻を自分とアンの姿に重ねていたのかもしれない。

何よりイーサンがきちんと集団に溶け込めて、みんなに大切にされていることが嬉しかった。まだまだ人にこき使われる身でありながらも、スカダー夫人の優しさやイーサンの笑顔にどことなく心温まりながら、しばらくシヴァ街でののったりした奇妙な暮らしが流れて行った。

シヴァ街にも大分住み慣れた頃、私はある昼下がり、千鳥格子柄の服に鳥打帽を被って、露店でチョコレートを一枚買った。

アンに会いに行こうと思ったんだ。

私は「ｓｗｅｅｔ　ｃｈｏｃｏｌａｔｅ」と書かれたラベルの印字を何度も指でなぞりながらシヴァ街を抜けて行った。

もちろん、自分が完璧に成功を収めたとは言い難いのは分かっている。現に今も雑用係だし、まだ人に使われる立場。それでも会いたかった。

アンは何て言うかな。

しきりにそんなことを考えながら歩いた。

俺を見たら何て言うかな。だってもうあの頃とはすっかり変わったんだもの。確かにまだまだ大出世とは言えないけれど、でももう俺はシヴァ街の人間なんだ。華やかな店の並ぶ街にも慣れたんだ。これだけで取り合えずは区切りとしよう。ああ、早く会いたいなあ。俺ももう十七歳。美しい盛りだもの。彼女きっと照れて下を向くだろうなあ。

あの頃の私は、トップと言えばシヴァ街だと思っていた。その上にあるものも計り知れないけれど、それでもやっぱりネオンライトタウンの最高の街に住んでいるというだけで、どこか誇らしい気持ちになっていたのだ。それだけで、アンの前に胸を張って立てると思った。彼女に会いに行って思いを伝えられると。

かつて少年時代を過ごしたアパートの前を通り過ぎ、ブラフマー街に着いた。懐かしいゴミ溜めの匂いが鼻につき、六年前の思い出が懐かしく蘇った。その記憶に導かれ、私はアンの元へと歩いて行った。初めて彼女に会ったあの時は、熱病に浮かされ意識も朦朧としていたのに、なぜか私は道順を完璧に覚えていた。

擦り切れた布切れを着た人々の中で、私の千鳥格子柄の服はひどく浮き上がって見えた。

途中で、幼いころイーサンと過ごしたあの小さな掘っ立て小屋の前を通った。ブロックを積み上げ、天井には布一枚を張っただけのその小屋には、小さな女の子が二人住み着いていた。姉妹なのか、友達同士なのか。私は疑問と懐かしさでしばらく小屋の中の女の子を見つめた。しばらくすると、小屋の中で横になっていた女の子達はふっと起き上がった。彼女らは小屋の前に立ち尽くす私を見てするすると近寄り、私の手の中のチョコレートを見つめて言った。

「お兄ちゃん、それちょうだい」

私は両手でチョコレートを抱いて勢いよく首を振った。すると彼女らはケロリとした顔で一度頷くと、何を思ったか服をするりと脱いだ。真っ平らな胸と、皮膚の下で盛り上がったあばら骨が瞬く間に露わになった。

「いいよ、さあ、どうぞ、綺麗なお兄ちゃん！」

そう言われた途端に、肌がぞくりと粟立った。とてつもない吐き気がせり上がって、私は走って逃げだした。あの巨大な長虫のように張り廻った骨が、ブツブツと吹き出物の突き出た肌が気持ち悪くて仕方なかった。残りの道中を夢中で走りながら、必死にアンの、あの星空のような頬を、燃える髪を、夢見る瞳を頭の中に引きだした。あの人はきっと俺を待っている、と何度も胸に呟いた。まだ俺を待っている。同じ場所で待っている。変わらぬ姿で待っている。

どの位走った頃だろうか。肺が潰れそうになって、私の足はよたよたと緩んだ。下を向いてしばらく荒い息を吐きだしていたが、ふと顔を上げた。辺りを見渡すと、あの夏の日の水の感触が肌に立ち昇った。

初めてアンに会った、あの娼館の井戸の前に私は立っていた。

涼しい水音が鼓膜をくすぐった。思い出の井戸の前で、洗濯をする二十歳前後の娘が私のよく知っている声で歌っていた。

胸が熱くなった。足を彼女ににじり寄せながら口を開けた。「アン」と呼んでも分かるのだろうか。呼んでもいいのだろうか。

結局「アン」と私の口が動くことはなかった。声を出すより先に彼女が前掛けで手を拭いて立ち上がり、こちらを振り向いたのだ。

いつの間にか、彼女の目線は私の上唇のあたりにまで

下がっていた。彼女が手に持っていた洗濯板を取り落とす音がした。緑の目を囲んでいた瞼が上下に開かれた。
「あなた……」
アンが唇を開けたまま言った。
「坊やなの……？　あの時の坊やなのね？」
私は答える代わりにこう言った。
「もう坊やじゃない。十七になったんだ」
彼女の瞳の上に水が張った。太陽の愛を受けた小麦色の手が私の胸に触れた。
「まあ、何て大きくなって……すっかり綺麗になって……」
私はポケットの中のチョコレートに手を忍ばせながら静かに言った。
「あの時のお礼を言いたいんだ」
彼女の手を取って自分の頬に添えさせた。肌の感触は、あの日と何も変わらなかった。アンは何も変わっていなかった。ただ一つ、私を見つめる瞳にあの日はなかった男への熱っぽい眼差しが加わっていた。お互いが男女にありつつあるのを感じると途端になんでもできる気がした。今なら何だって言える。どんなことだって怖くない。
「君のおかげなんだ。君が俺をこんなにまで変えてくれた。やせ細って死にそうな子供だった俺が今ではこの街最高のシヴァ街に住んでる。信じられる？　でも全部君のおかげなんだよ。この美しさを手に入れてから。もっとお金を稼ぐ方法を見つけたんだ。君と同じように体を売ったんだよ。それからはもうずっと素晴らしいことずくめだった。じゃんじゃんお金は貰えるし、飯にも困らないし、偉い人とも近づきになれる。それでとうとうシヴァ街に住めるまでになったんだ。でも、それもこれも全部君のおかげなんだ。ありがとう。この美しさも、たくさんのお金も、君がいなけりゃ手に入らなかった」
そして次に一呼吸を置いた。「愛してるよ」と言おうと口を開いた。しかし、私は唇をアイの形に半開きにしたまま、動かすことが出来なくなった。
頬に添えられた彼女の手がブルブルと震えた。顔をよく見て見ると、赤ではなく青い色が昇り、緑の瞳に張った涙がぽろぽろと転げ落ちていた。
「なんてことしたの‼」
甲高い声で突然彼女は怒鳴った。粒となって滑り落ちていた涙が次は滝になり、彼女は地面に崩れ落ちてわあっと泣き出した。
「ああ、なんてことしちゃったの、坊や！　ダメなのよ、そんなことしちゃいけないのよ！　どうしてもっと自分を大事にしなかったの！　ああ、だけど、いいえ！　いいえ！　あたしのせいなんだわ！　あたしが悪かったんだ！　ごめんなさい、坊や！　あなたに間違った道を教えてしまった！　全部あたしのせいだわ！　ごめんね、坊や！　本当にごめんね！」
私は足元にひれ伏す彼女を何も考えることもなくポカンと眺めた。訳が分からなかった。どうしてこの人はこんなに嘆き悲しんでいるのかさっぱり理解できなかった。だって俺はこんなに立派になったんだ。美しくなったんだ。お金持ちになったんだ。どうして悲しまなきゃいけないんだ。
結局それ以上、私は彼女に物を言う事ができなかった。瞳も喉もからからに乾いて、息が細くなった。
私はそっと泣き伏す彼女の前にチョコレートを置いた。そして切り裂くような泣き声を背に受けながら、振り返ることなく思い出の場所を離れていった。
アンとの二度目の面会は大失敗に終わった。アジトに帰っても、まだ頭が鈍器で殴られた後のようにぼんやりと痛んだ。
その日の夜、スカダー氏が私を自室に呼んだ。彼が近づきになりたいお偉方で、私に興味を示している者がいるから役に立ってくれと、スカダー氏はしかめ面をして札束を差し出した。私は黙って受け取った。
しっかりと入浴し、香水をつけ、寝台に座っていると、例の客が来た。彼は今までの客と同じように私に話しかけ、顔や体を触ってシャツのボタンに指をかけた。
服を脱がされてシーツの上に転がされると、壁にかかっている大きな姿見が目に入った。体中に垢を染みつかせた少年の姿がよく見えた。
私はチョコレートを欲しがって服を脱いだ女の子二人を思い出した。長虫のような気色悪いあばら骨も、ブツブツ出来ものだらけの悪寒のする皮も、ちゃんと自分のものだった。
「ああ、なんてことしちゃったの、坊や！　ダメなのよ、そんなことしちゃいけないのよ！　どうしてもっと自分を大事にしなかったの！」と、アンの声が聞こえた。
その時、突然体を触る男の手が気持ち悪くなった。私のすぐそばにある人の顔が、アンに全然似ていないと思い知った。
「触んないで！」
と、急に怒鳴って私は跳ね起きた。急いで寝台から逃げ出そうとシーツの上を這いずったが、男は構わず私の腰を掴んだ。どうやら芝居だと思っているらしい。
「やだ！　やめて！　やんない！　もうやだ、やんない！」

何年も忘れていた涙がボロボロと零れ落ちたが、抵抗する暇もなく下肢をするどく貫かれた。痛くて苦しくて、私は泣き叫んだ。「やだあ！　やだあ！」と血を吐くように叫び続けた。

その時、突然扉が勢いよく開いてスカダー氏が血走った眼で部屋に飛び込んできた。私の叫び声を聞いたのだろうか。

「助けて！」

と、私は彼に叫んだ。スカダー氏はしばらく困惑して私と男を見ていたが、すぐにはっとして駆け寄り私を男から乱暴に引き離した。半ば抱きかかえられるようにスカダー氏に肩を抱かれて私は隣室に連れていかれた。彼のジャケットを羽織って椅子に座り泣きじゃくっている間、スカダー氏は部下を呼び客の対応をするよう厳しい声で命じていた。

全ての指示が済み二人きりになると、スカダー氏は泣き続ける私に厳しい目を向けた。

「これはどういうことだ、ロバート。あの方は何かお前に酷い事をしたのか？　え？」

そう言われてはっとした。あの男は無体を働いたわけではない。事前にやっていいと言われたことをやっただけだ。嫌だと言ってもやめなかったのは、私が芝居を売っていると勘違いしただけだ。

「いいえ。何も」

次の言葉を続けると、ひどく惨めな気がした。

「俺が全部悪いんです」

スカダー氏のため息が聞こえた。彼が私の隣に腰かけ、失望の眼差しを間近で私に真っ直ぐ注いだ。

「私はな、お前やイーサンに覚悟があると思っていたのだ。だからあの子にもお前にも仕事をさせた。体を売らせ人を殺させた。だがお前たちは嘘を吐いていたんだな。しかも嘘にさえ気づかなかったんだな」

「そうだったんですね」

怒りなのか悲しみなのか、それとも甘えたいのかよく分からない感情を、私はスカダー氏にぶつけた。

「俺が今までやってきたことってあんなのだったんですね！　恥ずかしくて惨めで、嘘ばっかりなことだったんですね！　そんなこと、ずっと胸張ってやってたんですね！」

「ならもうやるな！」

スカダー氏も怒鳴った。

「出て行け！　お前もイーサンも今すぐここから出て行け！　ヴィシュヌ街に帰るがいい！　ここにいるのは覚悟のある者だけでいい！　お前達がいるべき所ではないわ！　ヴィシュヌ街で人間らしく暮らせばいい！」

「もう遅いです！」

そう叫んで、私はようやく母のことが分かった。どうして夜になると私を部屋に閉じ込めたのか。あまり体を洗ってくれなかったのか。母が死んでから、娼婦達がどうして私に体を売らせるという選択をしなかったのか。あの人達は今の私に、もっと早くなっていたのだ。

「俺は大事にしてくれた人をみんな裏切りました。好きな人さえ泣かせてしまった。もうどうにもなりません。もう汚れきりました。どこにも帰れません。進むしかないんです」

「お前ごときに何が分かる、このクソガキが！　人生などどこからでも始められるだろう！　進むだけが道か？　本当に帰れる場所がないのか？　お前は本当に汚れているのか？　やっと嘘に気づいたばかりのお前に何が分かるんだ！」

「じゃあ今までの俺はどうなるんですか！」

いつも嫌味ばかり言うムカつくスカダー氏に、私はなぜか正直に怒鳴り続けた。聞いてほしかった。とにかく怒鳴り続けたかった。

「小さなイーサンを育てるために必死だっただけなのに！　これしか方法がなかっただけなのに！　生きるためだったのに、全部全部ダメって言われなきゃなんないんですか！　なんで追い出されなきゃなんなかったんだよ！　体を売るくらいなら死ねってことかよ！　もう何も分からなくなった！　今までが嘘つきなら本当の俺はどこにいたんですか！　これから何になればいいんですか！」

スカダー氏は何も答えなかった。ただ俯いていた。だがずっと泣きじゃくる私の隣に座っていた。彼の横顔を見ていると、激しいしゃっくりが何度も喉を突いた。

これから何になれば。これから何をすれば。涙と一緒にそんな思いが零れ落ちた。これから。これからどうやって。これからどうやってアンに会えば。

シヴァ街を初めて見た日を思い出した。幼い瞳に強烈な憧れを焼き付け、自分はまだちっぽけな存在だと思い知らされたあの日。今もあの日と同じだろうか。

アンは何故泣いたのだろうか。零れる思いはそんな疑問に変わった。貞操を失った俺を憐れんだのだろうか。俺が惨めに見えただろうか。名も知らない男と毎日寝ている俺はかわいそうなのだろうか。そんなに俺は惨めな存在だろうか。あの人に美貌を貫ったのに、それでしっかり成功を収めていないから失望させたのだろうか。

隣にはまだスカダー氏がいた。彼は前を見つめたまま黙って座っていた。そんな彼を置き去りにして私は立ち上がった。

なら成功してやろう。二度と憐れな存在と言われないくらいに。自分を惨めに思わないように。「あなたにもらったものは決して無駄じゃなかった」とアンに胸を張って言えるように。最後まで上り詰めて、アンと愛し合えるように。スカダー氏の言う覚悟を持って。恥じも悪徳も何もかも食らって、真実に変えて。

目指すのはこの街の頂点。ヴァルナ社のトップ。

（続く）